記憶の果て

浦賀和宏

KAZUHIRO URAGA

The End Of Memory I

上

講談社文庫

講談社文庫

記憶の果て（上）

浦賀和宏

講談社

|著者|浦賀和宏　1978年生まれ。'98年、第5回メフィスト賞を受賞してデビュー。京極夏彦氏の絶賛を受ける。『彼女は存在しない』（幻冬舎文庫）は20万部を超えるベストセラーとなり話題となる。主な著書には『地球人類最後の事件』『生まれ来る子供たちのために』『萩原重化学工業連続殺人事件』『女王暗殺』（以上、講談社ノベルス）、『眠りの牢獄』（講談社文庫）、『彼女の血が溶けてゆく』『彼女のため生まれた』（ともに幻冬舎文庫）などがある。

記憶の果て（上）

浦賀和宏

© Kazuhiro Uraga 2014

講談社文庫

定価はカバーに表示してあります

2014年3月14日第1刷発行

発行者——鈴木　哲

発行所——株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001

電話　出版部（03）5395-3510

販売部（03）5395-5817

業務部（03）5395-3615

Printed in Japan

デザイン—菊地信義

本文データ制作—講談社デジタル製作部

印刷———信毎書籍印刷株式会社

製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277778-0

Contents

記憶の果て 7

講談社文庫

記憶の果て(上)

浦賀和宏

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Contents

記憶の果て——7

記憶の果て

上

The End Of Memory I

創の美学

1

親父が死んだ。自殺だった。

「お父さん死んじゃった」

親父の死を告げたおふくろのその言葉は、今でも頭の中で鳴り響いている。まるで不快な、出来損ないの音楽のように。その音楽は頭の中で、メロディとハーモニーが勝手に増殖して、日に日に不快さを増していった。

忘れようとすればするほど、そのボリュームは上がってゆく。

何時（いつ）も朝はラジオのＤＪで始まる。

ラジオは時間が来ると自動的に流れるようにタイマーが付いている。目覚まし時計

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の代わりだった。

ＤＪのお喋りはこれ以上ないほど陽気で明るい。お喋りの合間に流れだす音楽が、目覚めたばかりの脳を刺激する。だから何時も目覚めてもすぐにはベッドから出ずに、暫く(しばら)はラジオを聞き続けていた。

高校に通っていた時は、頃合いを見計らってベッドから出た。だが卒業したばかりの今は時間的な制約は一切ない。一ヵ月後に控えている大学入学まで暇を持て余している。だから最近の朝は際限なくベッドに潜(もぐ)ってラジオを聞いていた。

だが、その平穏な朝も四日目にして破られた。

その日、ぼんやりとした意識の中に流れ込んできたのは、ＤＪの声ではなくおふくろの声だった。

「直樹、起きて」

おふくろの手が体を揺り動かしている。目を開けるとおふくろの顔があった。

何時も見慣れているおふくろの顔、十八年間毎日のように見てきたおふくろの顔、でもこんなに至近距離で見たのは何年ぶりだろう。顔は艶(つや)をなくして細い皺のようなものが刻み込まれ、髪は白髪染めの所為(せい)か、黒と茶色のまだらになっていた。

おふくろの目は赤かった。

さっきまで泣いていたように見えた。

眠い目を擦(こす)り、おふくろに理由を尋ねようとした。わざわざ息子を起こしに来た理由、そして目が赤い理由を。だが口を開く前におふくろは答えを言った。それは二つの疑問の答えには十分過ぎた。

「お父さん死んじゃった」

何を言っているのかが分からなかった。

「お父さん死んじゃった」

再び、駄目押しするように言った。

おとうさんしんじゃった。おふくろは確かにそう言った。

「……大丈夫？」

その言葉が自分に向けられていることさえも分からなかった。

お父さん死んじゃった――。

親父が死んだ――。

悲しいなんて感情は起きなかった。ただ唐突に、日常から非日常へと投げ出されたような不安感だけが頭の中を支配していた。

自問した。これは夢か？

夢である訳がなかった。

さっきまで寝ていた。そしてたった今目覚めた。目覚めた時から始まる夢なんてあ

るのだろうか？　朝日が部屋に差し込んでいる。おふくろの姿は光と、宙を舞う埃によって強調され、これが現実であることを告げているように思えた。

「……なんで死んだんだ？」

唾を呑み込み、乾いた喉をわずかばかり潤すようにして、おふくろに尋ねた。

だがおふくろはそれに答えなかった。何も言わず立ち上がって、泣いているのを隠すようにして部屋から出ていった。

そして、一人取り残された。

今の一分にも満たない短い時が、頭の中で繰り返されてゆく。考えれば考える程、頭はだんだんと眠気から冴えてくる。これは紛れもない現実なんだと、冴えた頭は呼びかける。

親父は死んでしまったのか。

ゆっくりと身を起こし、ベッドから出た。昨夜脱ぎ捨てたままの、何日も洗濯していないジーパンを履き、皺だらけになっているデニムシャツを着た。

腕時計を見る。時計の針は八時三十四分を指していた。ラジオをオフにした。タイマーは九時にセットしてある。こんな朝に陽気なＤＪの声は似合わないような気がした。

本棚のガラスケースに自分の顔がぼんやりと浮かぶ。十八年間付き合ってきた顔

は、寝起きの為か何時も以上に不細工に見えた。髪をゆっくりと指で梳かす。髪が数本抜け、指に絡みつく。

部屋の外に出るのは、少しのためらいがあった。部屋の外は、親父の死という現実で満たされているように思えた。しかし親父の死を知った今、既にこの部屋の中もその現実で一杯に満たされているのだろう。

この部屋も現実の一部なんだ。

そんな、当たり前の事実に気付く。

固くドアを閉めて、部屋の中に閉じこもり、孤独という殻に逃げ込んでも、それは一時の逃避にしかすぎない。だから、

――親父の死を受け入れなければならない。

ゆっくりとドアを開く、と同時に階段の下の方から知らない男の声が聞こえてきた。一体誰の声だろう。

男の声は二階から聞こえて来るようだった。ここは三階だ。二階にあるのは――親父の書斎だ。

ゆっくりと階段を下りながら声の主を探した。二階に辿り着くと、親父の書斎の前でおふくろが見知らぬ中年男と話し込んでいた。どうやら声の主は彼らしい。

すぐに思った、あの男は刑事だと。薄くなった頭に突き出た腹、さえないスーツ姿

は、町を歩いている、いかにも中間管理職のサラリーマンといった感じの人々とあまり変わらなかったが、落ちついた口調と鋭い眼差(まなざ)しは、どんな情報だろうと決して見逃さないのだという気迫のようなものが感じられた。

おふくろと中年男の会話の端々(はしばし)が聞こえてくる。やはりあの男は刑事だ。その時、一体何処から現れたのか、若い男の警官が刑事に近づいて何か言った。

その光景を目にして、眩暈(めまい)がした。

中年男を見て刑事だと思ったのは、単なる勘だ。だがあの若い男は、何処から見ても警官以外の何者でもない。何故なら彼は警官の制服を着ている。彼を見て中間管理職のサラリーマンだと思う人間は、恐らくいないだろう。

一体この光景は何なんだ？

朝起きるやいなやおふくろに親父の死を知らされ、部屋から出ると廊下を刑事と制服警官がうろうろしている。そんな光景は十八年間この家に住んでいても見たことがなかった。

日常の光景ではなかった。

紛れもなく非日常の光景だった。

刑事と目が合った。

「息子さんですか」

刑事は低い声でおふくろに尋ねた。おふくろがゆっくりと頷く。

刑事は近づいてきて、軽く二回肩を叩いた。

その行動が自分を励ましているのだということに気付くまで時間がかかった。刑事は、再びおふくろと話を始めた。

体中の気力が抜けたような感じがして、廊下に座り込んだ。

おふくろと刑事の話が続いている。その声は確かに聞こえているのに、会話の意味を理解することが出来なかった。

不意に昨夜の夕食の風景が頭の中に浮かんだ。テレビの音をＢＧＭにした、父親と母親と息子の何時もと変わらぬ夕食風景だった。

夕食はカレーライスだった。

おふくろは新装開店したスーパーの話をしていた。あそこの店はインスタントコーヒーが安いだとか、アルバイトの高校生の髪が茶色かっただとか、そんなどうでもいい話だった。おふくろの話に相槌(あいづち)を打ちながらも、意識は完全に、テレビのくだらないバラエティー番組に向けられていた。

そして親父は——。

親父は相変わらず哲学者のように小難しい顔をして、カレーライスを黙々と口に運んでいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com